

広報こがまち

KOHO KOGAMACHI

9

SEP 1997
No. 488

人を助けることは
自分を助けること

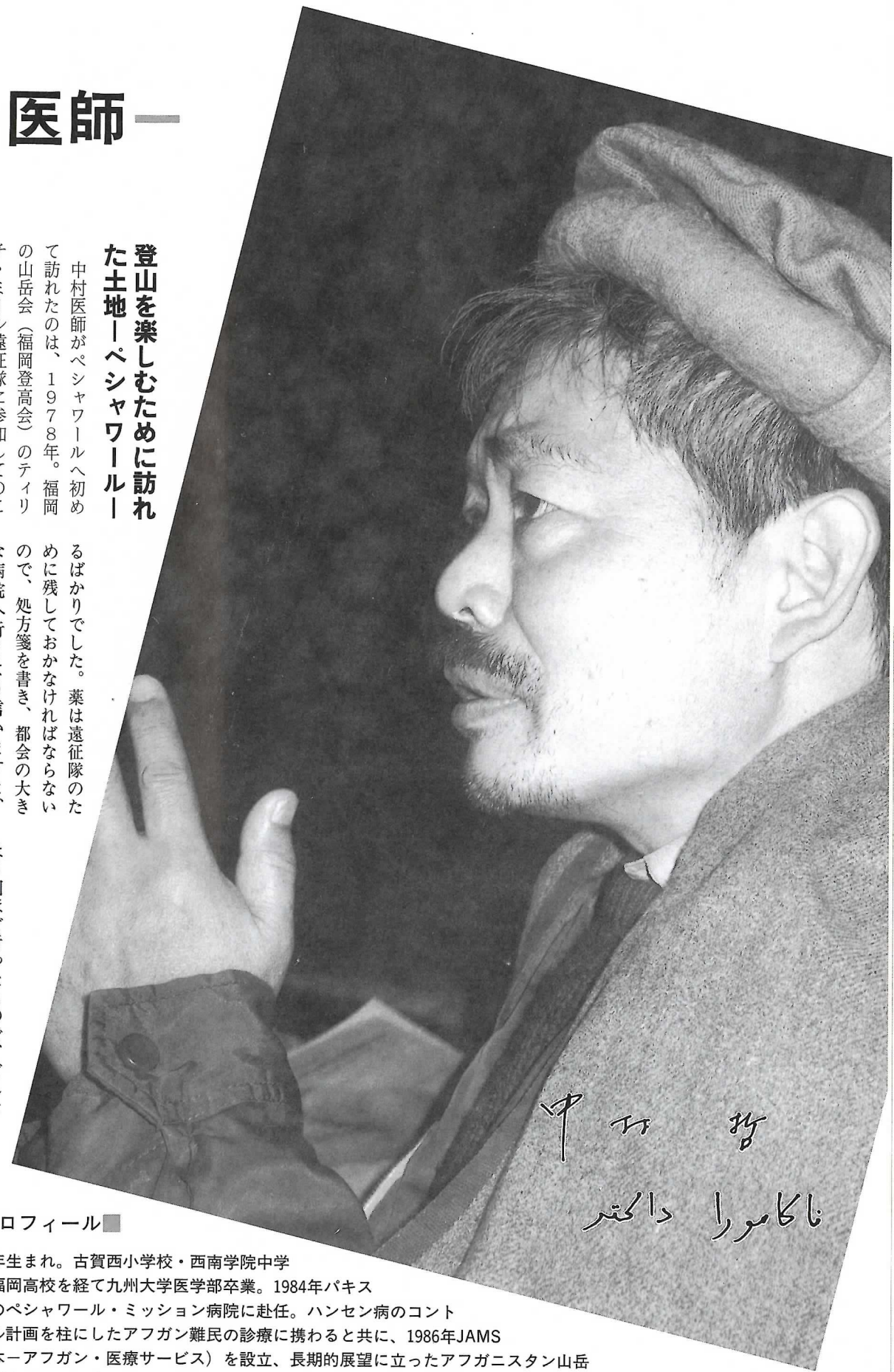
パキスタンの北西辺境州の州都ペシヤワールには、1979年に始まった隣国アフガン難民が押し寄せ、多くのアフガン難民が押し寄せ、おおよそ20年に及ぶ内戦は、六百万人の難民と二百万人の死者という犠牲者を生んだ。古賀町で育った一人の医師が、ペシヤワールに出会い、ハンセン病を中心とした医療活動を始めたのは、15年前。何が彼をペシヤワールに駆り立てているのか。医師中村哲を追う。

中村哲 —医師—

登山を楽しむために訪れた土地—ペシャワール—

中村医師がペシャワールへ初めて訪れたのは、1978年。福岡の山岳会（福岡登山会）のテリッチ・ミール遠征隊に参加してのことです。

「遠征隊には、必ず医者が同行するんですよ。当時、パキスタンの観光省から、住民の診療拒否をしないよう申し渡されていて、みちみち病人を看ながらキャラバンを続けたんです。どこから聞きつけたのか、遠征隊がくることは知れ渡っていて、患者の群れは増え



中村哲
ناکامورا تاکه哲 だくち

■プロフィール■

1946年生まれ。古賀西小学校・西南学院中学校・福岡高校を経て九州大学医学部卒業。1984年パキスタンのペシャワール・ミッション病院に赴任。ハンセン病のコントロール計画を柱にしたアフガン難民の診療に携わると共に、1986年JAMS（日本—アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガン山岳無医村地区での診療モデルの創設を目指しつつ現在にいたる。著書に『ダラエ・ヌールへの道』『ペシャワールにて』『アフガニスタンの診療所から』などがある。現在 PLS院長 JAMS顧問医師 馬場病院副院長

中村

『困った人を放っておいて、
自分はこのうのうと生きている。
この不条理は何だろう？』

そんな疑問が、中村医師を医療活動へ導いた。

その出会いから6年後、 医療活動は始まった

「登山や旅行でペシャワールへそんな危険と隣合わせのなかで、医療活動は始まりました。ハンセン病根絶へ向けた戦いの幕は、こうして上がったのです。」

ハンセン病と向き合う

実際に医療活動を始める2年前（1982年）に、中村医師は赴任地であるペシャワールを下見し、そこで、ハンセン病を看る外科医が不足している現実を知ります。ハンセン病とは、らい菌による慢性的の細菌感染症です。らい菌は主に皮膚と末梢神経を冒し、様々な皮膚症状と感覚障害、運動麻痺が主症状となって表れます。かつては不治の病と言われていましたが、現在は有効な治療薬が開発され、早期に治療を開始すればほぼ完治する病気です。

「同じ医療協力をするのなら、一般の医師はたくさんいたので、

は3回ほど行ったもので、どんなところかは知っていました。だから、JOCIS（日本キリスト教海外医療協力会）から派遣の話があったとき、まんざら知らないところでもないからと、気軽に引き受けたんです。」

そのころのペシャワールは、アフガニスタンでの内戦が激しさを増したため、アフガン難民が北西不足している分野で協力したほうがいいと思っていました。」

1112。そんな単純な答えを出すかのように、中村医師はハンセン病に取り組みことを決意しました。そして帰国後、国内外でハンセン病に関する研修を受け、改めて1984年にペシャワールのペシャワール・ミッション病院に赴任した後、現在はPLS（ペシャワール・レプロシー・サービス）でハンセン病と向き合っています。

「でも、使命感なんていう大それたものを持っていく訳ではないんです。ただ、困っている人がいて、それを見ないふりして自分が楽をするというのは、どんなものかなと思っただけなんですよ。」

静かな語り口で、そう中村医師はつけ足しました。その言葉からは、「知ってしまった」から自分ができることはしようという率直

餓えかかった我が子とも 思えるペシャワール

「なぜペシャワールなのかというのを、よく聞かれます。ほかにも救援を待っている国や地域があることも知っています。でも、餓えかかった我が子を親が見捨てられないのと同じで、放り出すことはできません。目の前にもあるものを、見ないということはできないんです。一所懸命、目の前にあるもの（ペシャワール）について考える。今はそれだけしかできないんですよ。」

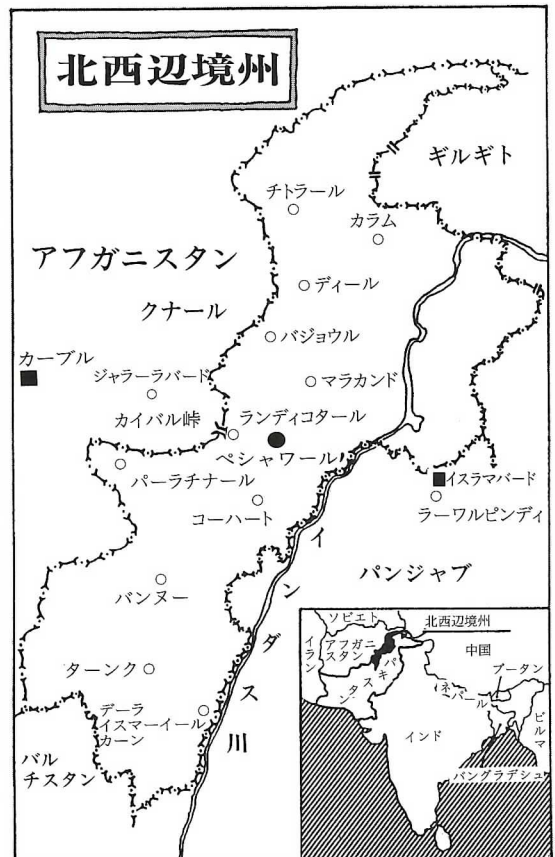
そう言うって笑う中村医師。現実を見据えている力がそこにありました。ペシャワールは、日本と比べて人々は貧しく、治安も悪いところなんです。しかし、中村医師はこう言われます。

「ペシャワールには、愛憎も苦



1 PLS(ペシャワール・レプロシー・サービス)での診療風景。PLSは、現在入院ベッド数は40床、スタッフは37名です。ここへ年間約1万人の外来患者と約600名の入院患者への治療が行われます。

2 病気の早期発見のため巡回診療に向かう中村医師。巡回診療は、無医地区に医療スタッフが赴き、ハンセン病をはじめとするあらゆる病気を発見することを目的としています。





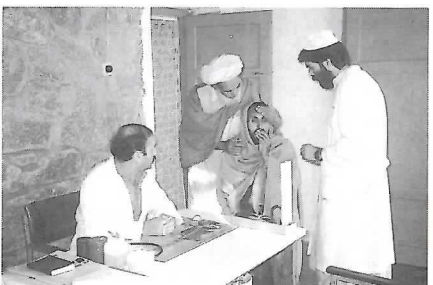
巡回診療の途中で診察を請われる中村医師。辺境の地では、診察を受けられる機会は極めてまれです。



JAMS（日本-アフガン医療サービス）で診察を待つ人々。朝5時から行列ができます。



将来辺境の地で診察することになる少女たちにハンセン病について教授する中村医師。



国境を越えたアフガニスタン内にあるJAMSダラエ・ヌール診療所の診療風景。



ペシャワールで建設中の新病院。来年の4月に完成する予定です。

荒々しい現地の暮らしを 想像させないやわらかさは 気負いというものがなからだろうか



「古賀町は、今もいいところですが、昔もいいところでしたよ。海が近くて、自然も豊富で。小学1年生の夏から20代の後半まで住んでいたんですが、庭内から清滝、犬鳴山系、西山まで行って遊んでましたね。昆虫採集が好きでしたから。古賀郵便局（旧古賀郵便局）の吉川さんという局長が、よく（昆虫採集に）連れてってくれたのを覚えています。」

現在古賀町にはお姉さんが暮らしており、今年のお盆には帰郷したとのこと。また、偶然にもお話を伺った8月18日は旧古賀郵便局が解体された日でした。それを聞いた中村医師は、驚きながらも昔を思い出すように目を細め、昔を懐かしんでいるように見えました。山と蝶を愛するようになり、ペシ

ヤワールへと導かれたのには、古賀町の自然も大いに影響していると思われまふ。

「いなくなる」という仮説には、ご自身の死さえも含まれています。その想いの深さが、「ペシャワールは我が子と同じです」と言い切れる理由でしょう。何の見返りも期待しない無償のものであると感じられました。

中村医師は、アフガン難民を救うのは、アフガン人の手によって行うべきだと考えています。JAMS（日本-アフガン・医療サービス）はその意志が形になった医療サービス団体で、ハンセン病を含んだ一般診療が行われており、運営資金はすべて寄付金です。ペシャワールにある本部のほか、帰りたくても荒廃して住む場所ではなくなくなったアフガニスタンで、医療面での不安を取り除けるよう、国境を越えて三地域に診療所も開設されました。現在難民の数は徐々に減り、荒野も農地に姿を変えつつあるそうです。

「今、現地で人材育成に力を入れています。私がいなくなってもこの活動を継続していかなければ、今まで築き上げたものが無駄になってしまうし、やはり、アフ

ガニ人によるアフガン人のための医療こそが必要だと思ふのです。」「いなくなる」という仮説には、ご自身の死さえも含まれています。その想いの深さが、「ペシャワールは我が子と同じです」と言い切れる理由でしょう。何の見返りも期待しない無償のものであると感じられました。

人間だれしも幸福でありたいと願います。その中に、「自分だけ幸福ならそれでいい」という気持ちも含まれていることでしょうか。しかし、本当にそれで幸福だと言えるのでしょうか？

中村医師はそんな疑問と向き合ったのだと思います。そしてその疑問に対し、まやかしの答えでは納得できなかったのではないのでしょうか。

「人を助けることは、自分が助かることです。」

その言葉に、中村医師の答えを見たとおもう。生と死が隣合わせになっているペシャワールで、中村医師の医療活動はこれからも続きます。

昔の仲間が頑張ったとちやけん

ーペシャワールハンセン病院建設基金古賀有志の会ー

「昔近所に住んでいた仲間がすごいことをしようと聞いて、こりやあ自分たちも何か力になりたいねえと話していたところ、一人二人と集まってきてこの会ができました。」

会の成り立ちを亀田代表に伺うと、そんな答えが返ってきました。会の目標は、ペシャワールに現在建設中の新病院の建設資金を集めること。新病院は建設中ではありませんが、その建設・運営資金はまだ目標額に達していません。

応援せんとね

中村医師の話では、土台・骨組みなど、できることから始めて、内装や医療器具は資金が集まり次第考案していくこと。そんな友人を少しでも力づけようと、今年の5月から活動は始まりました。会のメンバーは、かつて中村医師が古賀町に住んでいたころ、近所に住んでいた遊び仲間が中心になっています。

会合では、「哲ちゃんも静かだ優しい子やっつもんねえ」とだれかが話したすと、「そうそう」と

15年間支援しているのは寄付金が

生きた医療に使われているから

ーペシャワール会 事務局ー

毎週水曜日、午後7時。福岡市内にあるマンションの一室には、ペシャワール会事務局の会員たちが集まっています。仕事や学校の帰りはまちまちです。会員一人ひとり可能な範囲で、工夫しながら支援活動を行うことが会則のため、7時より早かったり遅かったりしながら、部屋は8時にはいっぴいになります。

「普通のお医者さんのイメージとはかけ離れてるでしょう。」

会員のお一人は、中村医師の印象をそう言うにつこり。私利私欲など考えない中村医師に魅かれて入会したと語ってくれました。現地の活動資金は、日本全国にいたるペシャワール会の会員による寄付金で運営されています。この中に中村医師の給与は含まれていません。1996年度の会計報告では、94%が現地活動費として、残りの6%は会報の発行・事務局の家賃などと明確に会報の中で発表されています。（1996年の

だれかが相手を打ち、一本が好きやっつたよ」「辛抱強い人やっつたよ」と同窓会のような会話に花が咲くこともあります。

同った日の会合では、これから活動方針やスケジュールなどが話し合われ、活発な意見が飛び交いました。旧友の手で行われる活動は、これからますます裾野を広げることでしょう。集まった資金はペシャワール会を通じて中村医師に渡されるということです。

ペシャワールハンセン病院建設基金古賀有志の会事務局
〒811-3101
古賀町中央3丁目8番39号
☎0942局3145番 (矢野宅)

全事業額は八千八百八十九万四千三百一十円でした。

また、会員の中からボランティアとしてペシャワールへ渡った医師・看護婦・レントゲン技師などもおられます。同った8月27日には、看護婦として活動している藤田千代子さんが一時帰国されておられ、現地報告が行われました。自由な会風の中から生まれる大きな支援力は、中村医師の魅力と生きた医療活動にあるようです。

ペシャワール会事務局
〒810
福岡市中央区大名1丁目10番25号
上村第2ビル307号
☎・FAX
☎092)725局3440番

取材を終えて

特集を組むにあたり、広川町にある馬場病院を訪ねて中村医師にインタビューをお願いしました。お会いする前に読んで著書や新聞に掲載されたエッセーなどから、勝手に猛々しいイメージを作っていたのですが、出会った瞬間にそれは消えてなくなりました。なぜなら、「遠いところをよくおいでくださいました」と気遣い、インタビューの途中で診察にたつきも申し訳なきように席を外される、そんな静かな姿を見たからです。ですから、こんな優しい人がなぜペシャワールで活動を続けているのか不思議になりました。しかし取材を進めるうち、その優しさは他人に向けられたものであり、自分自身にはひどく厳しいということがわかってきました。

他人に優しく、自分に厳しく。よく使われる台詞ですが、それを実行するのは難しいことです。私自身はその反対の生活を送っています。だからこそ、「なぜそんなことができるのですか？」という質問を、中村医師に問うたのです。中村医師はそんな私を否定しませんでした。人間にはいろいろなタイプの人間がいることを知っているからでしょう。その優しさ、自分の気持ちに率直に生きられる強さを目のあたりにして、自分の小ささを感じました。

真子静香

※ 記載した写真は、ペシャワール会事務局よりお借りしました。